

三重県里遺跡発見の大型石棒について

— 付・三重県内出土の大型石棒集成 —

奥 義 次

1 はじめに

平成 18 年 9 月 5 日、伊勢市在住の中森巖氏が当センターに大型石棒を持参された。お話を聞くと、30 数年ほど前のことらしいが、ご実家のある度会郡度会町大久保で、宮川が増水した折りに、段丘崖沿いの表土が洗われ、その中から亡父昱太郎氏が発見をされたという。その後、現地確認のため、ご実家を訪ね、巖氏の甥に当たる慰氏にも経緯をお聞きし、大型石棒発見地点とその周辺を踏査した。以下に同石棒の紹介をおこない、併せて県下の大型石棒についても出来るだけの集成と若干のまとめをしておきたい。なお、同石棒は今後の活用をはかるため、当センターへ寄贈をいただいた。

2 大型石棒発見地点とその周辺

第 1 図で分かるように、宮川は度会町大久保付近でも大きく弧を描いて曲流する。大型石棒発見地点は北流してきた宮川が東へ流れを変えようとする、まさに攻撃点に当たる部分に位置する。この付近は中位段丘が断続的に展開し、多くは茶畑として利用されている。遺跡台帳によると、やや北側の窪地を中心に惣門遺跡が登録され、皇學館大学考古学研究会の分布調査で、縄文土器片・山茶碗片・土師器片・永楽通宝などが確認されている。このうち、縄文土器片は無文の小片らしく、まとまった資料とはいえないようである。大型石棒発見地点はすぐ西側で中位段



第 1 図 里遺跡位置図 (網点が同遺跡推定範囲、▲印は大型石棒発見地点。1 : 5,000)



写真1 里遺跡・大型石棒発見地点近景（西南から）

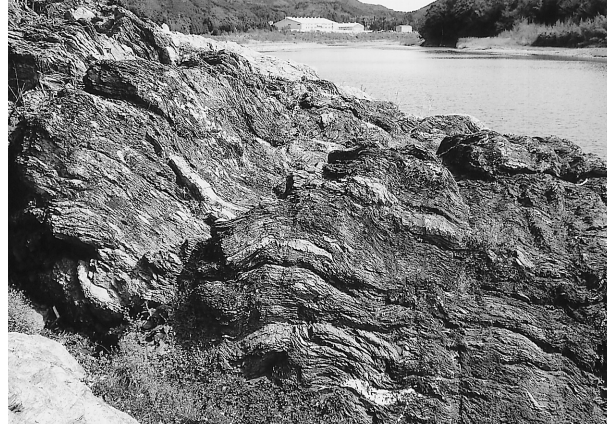
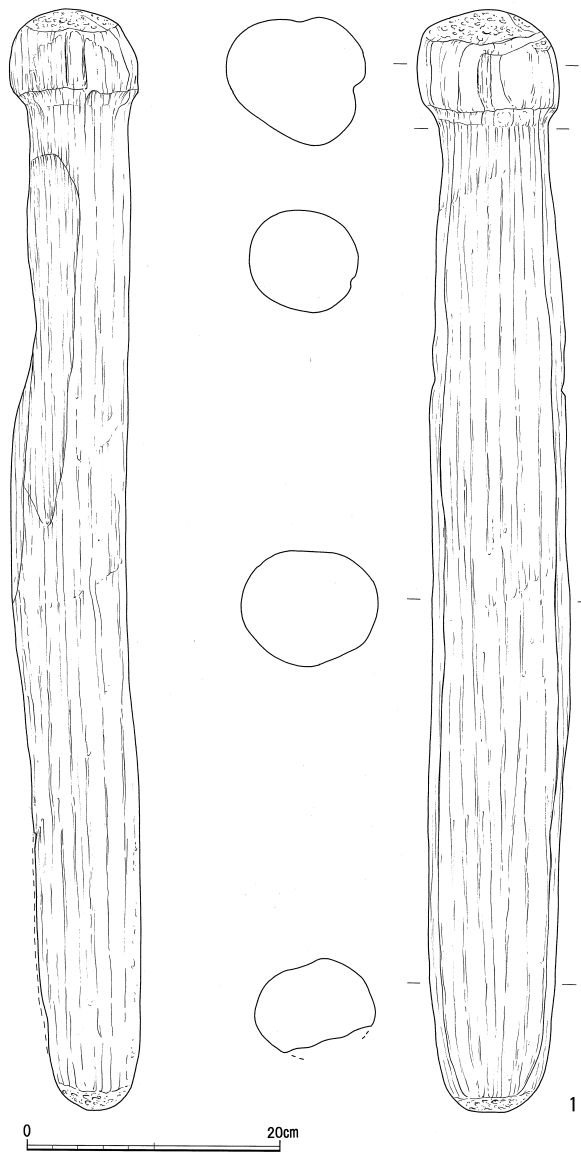


写真2 馬乗り岩（南から）



第2図 里遺跡出土・大型石棒実測図（1：6）



写真3 里遺跡出土・大型石棒

丘に接続し、そこから宮川に沿って北東方向に一段低い段丘がのびる、付け根付近に相当する。南から東にかけては段丘崖をおいて眼下に宮川の河流を眺める。また、東側河岸には、写真2に見るような緑色片岩の巨大な露岩（通称馬乗り岩）が宮川に突出している。段丘と露岩の間は鞍部を形成し、そこには今も年中、わき水の湧出する泉がある。今回の分布調査では人家周辺も茶園ばかりで、見るべき裸地はほとんどなく、石棒に関連するような手がかりは得られなかった。ただ、中森慰氏の話によると、大型石棒発見地点の北々東数十mにある同氏宅東隣の茶畑では石鏝などが、以前にまとまって確認されていることから、北東に張り出す、この段丘をマイクロな地形単位として捉え、該当の小字名から里遺跡と称することにした。したがって、遺跡範囲（推定を含む）は惣門遺跡の東方から南方にかけて、段丘上に隣接することになる。

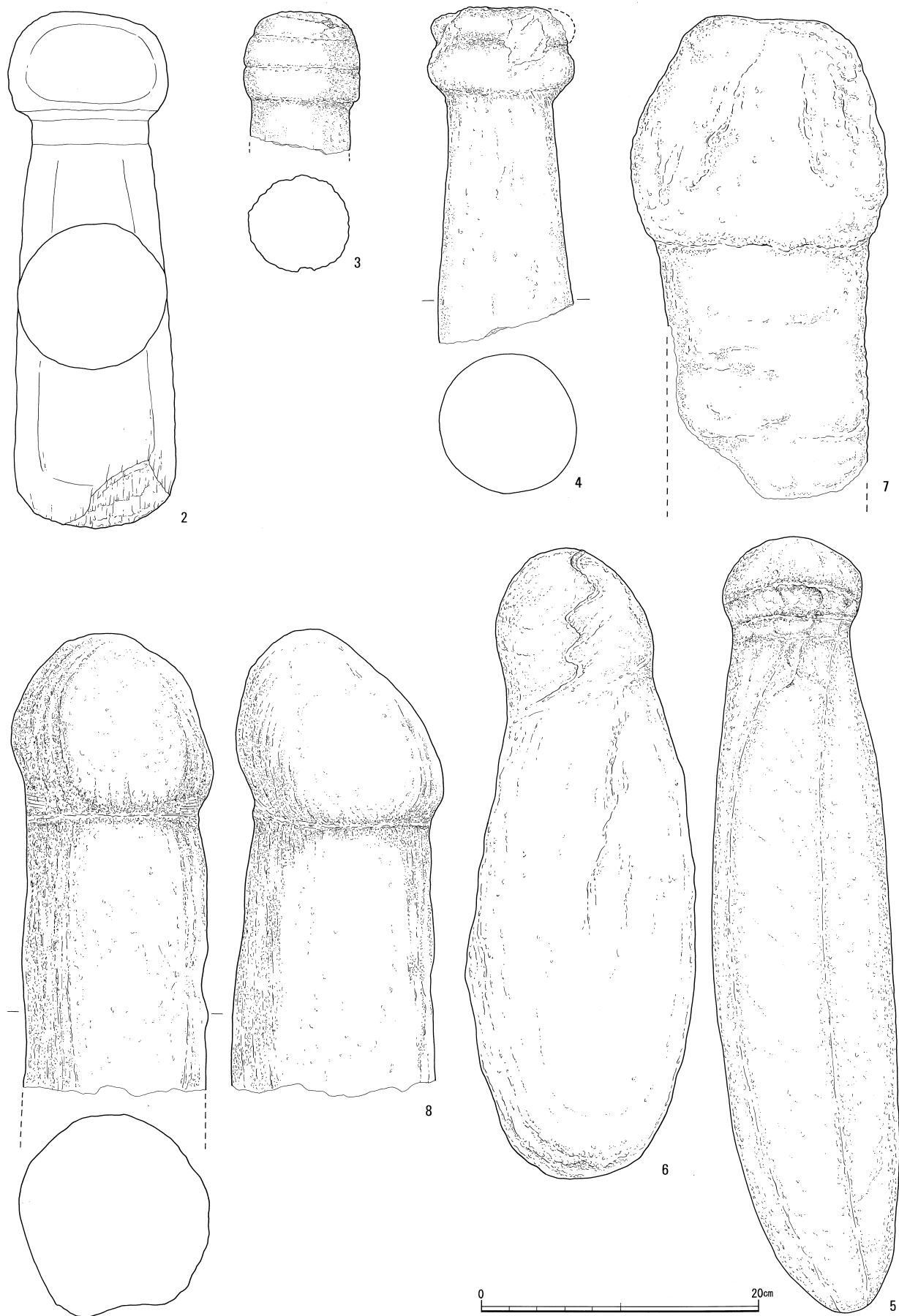
なお、大型石棒発見地点は平成16年9月末、台風21号の際にも記録的な豪雨により冠水し、表土が流出したため、置土をされ、現状に至っている（写真1は現状）。

3 大型石棒について（第2図）

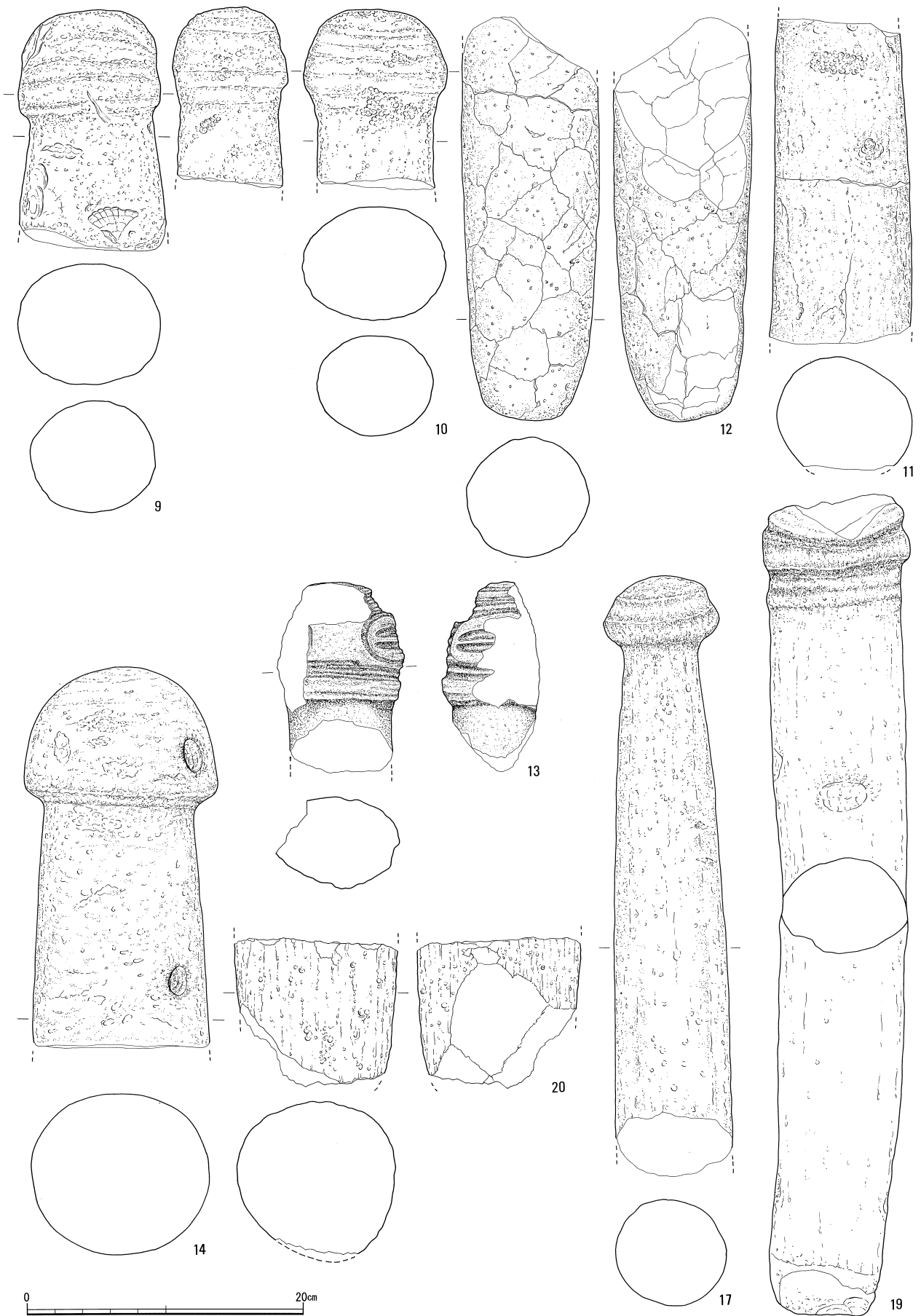
胴部側面が部分的に剥落しているものの、頭部（単頭）から基部にいたるまで、ほぼ完全形である。現在は胴部2箇所折れているが、出土時点でも一箇所は折れていたようである。頸部に敲打痕を全周させて、まるで削り出すように頭部を作出している。基部と頭部上端面も敲打によって、丸味を帯びる。したがって、そのままでは自立しない。表面は絹糸光沢をもつ緑色片岩独特の地肌ないし質感を呈していることもあり、研磨の度合いについては分かりにくい。また、それだけに百パーセント完成品とは言い切れない。折損した断面には薄い紙を束ねたような線状構造が観察される。法量は長さ86.3cm、最大幅（頭部）11.0cm、頸部幅8.6cm、厚さ10.2cm、重さ14.84kg。筆者が知る限り、現存品ではおそらく三重県下最大のものであろう。石材はすでに触れたように、在地で産出する緻密な緑色片岩を利用している。前述の「馬乗り岩」は同岩主体の見事な露頭であるが、当石棒の石材と比べると、現状の露出面はややラフな印象を受ける。しかし、この付近の宮川沿いにはこのような露頭は随所で認められる。同岩は層（縞）状の片理性を利用すれば、大型石棒のような長大な素材を獲得するのには適しており、「馬乗り岩」を含めて、近くで比較的容易に調達できたものと思われ、このあたりに大型石棒製作地があったとしても不思議ではない。⁽¹⁾

図番号	遺跡(発見地)名	所在地	長さ(現長)	頭部最大幅	頸部幅	身部最大幅	厚さ	重量	石材	推定時期	文献番号
1	里	度会郡度会町大久保	86.3	11.00	8.60	10.90	10.20	(14.84)	緑色片岩		
2	川向	いなべ市北勢町潮木	37.0	11.50	8.40	11.50	11.50	7.65	絹雲母片岩	中期末葉	1
3	薬師堂西	〃 〃 阿下喜	(10.1)	8.40	7.00	(7.20)	7.00		青石		2
4	加毛神社境内	〃 〃 垣内	56.0	10.00	8.50	12.80					3
5	〃	〃 〃 垣内	(24.0)	10.50	7.60	(9.50)	10.00				3
6	八幡社神宝	〃 〃 奥村	46.0	11.00	10.40	16.40					3
7	中山神社境内	〃 〃 中山	34.0	18.50	15.10	(13.70)					3
8	六反	〃 〃 麻生田	(30.5)	12.90	11.10	12.20	14.40		輝緑岩		4
	西与次右工門	員弁郡東員町筑紫									
	道山	四日市市南小松町道山	74.0	大8.8,小6.2	大6.8,小5.0	7.60	7.10	7.55	ハイアロ	晩期末葉?	
9	天白	松阪市嬉野釜生田町	(17.3)	(10.40)	9.00	(10.70)	(9.20)	(2.36)	石英質砂岩	後期中・後葉	5
10	〃	〃 〃	(12.8)	(10.25)	8.40	(8.40)	(8.10)	(1.51)	溶結凝灰岩	〃 〃	5
11	〃	〃 〃	(13.3)			(10.10)	(8.00)	(3.11)	砂岩	〃 〃	5
12	〃	〃 〃	(28.7)			(9.90)	(8.60)	(3.03)	砂岩	〃 〃	5
13	城山	多気郡明和町岩内	(13.7)	(9.00)	(7.40)	(7.40)	6.60				6
14	マイラ	〃 多気町土羽	(27.5)	14.00	10.90	(12.80)	(11.60)	(5.80)	凝灰岩		7
15	ソウダ	〃 〃 片野	(65.3)	12.00	9.30	12.30	11.30	12.20	溶結凝灰岩		8
16	〃	〃 〃 〃	56.6	18.00	16.70	20.60	18.60	36.20	凝灰岩質砂岩		8
17	黒坂墓地	度会郡大紀町野原	(42.7)	8.30	5.20	8.20	7.60		結晶片岩		9
18	佐八藤波	伊勢市佐八町	(12.4)			(11.40)	9.00	(1.58)	凝灰岩	後期前葉から晩期	
19	賛	鳥羽市安楽島町	(58.3)	10.60	9.40	9.80	7.00	8.50	緑泥片岩	後期前葉	10
20	大差地山?	志摩市志摩町越賀	(10.6)			(11.70)	(10.80)	(1.76)	凝灰岩質砂岩	中期中葉?	11
21	清水北	伊賀市大野木	(14.2)			(11.10)	11.00	(2.23)	凝灰岩	中期末葉～後期後葉	12

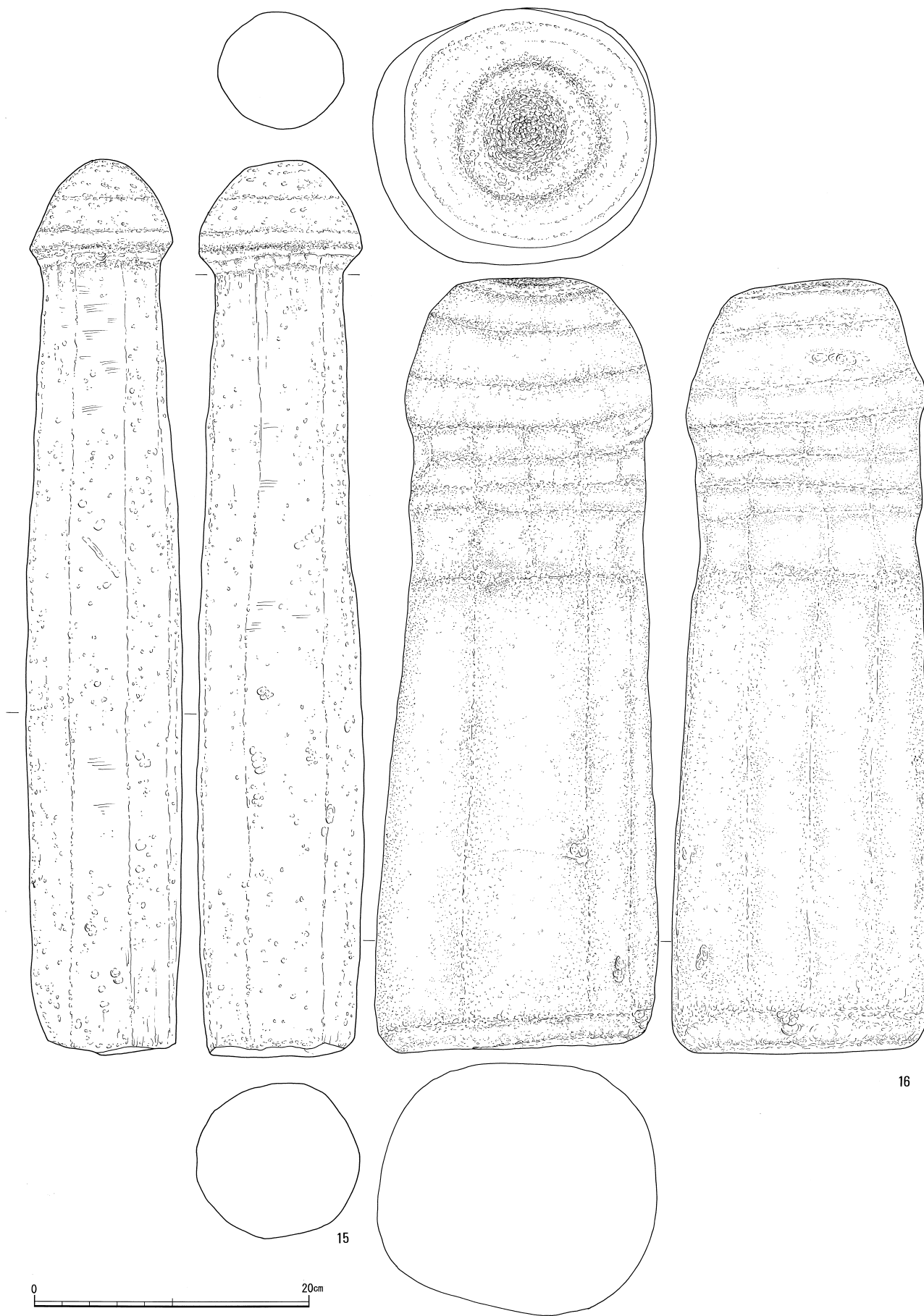
第1表 三重県内出土の大型石棒一覧表（今回集成分を中心として）



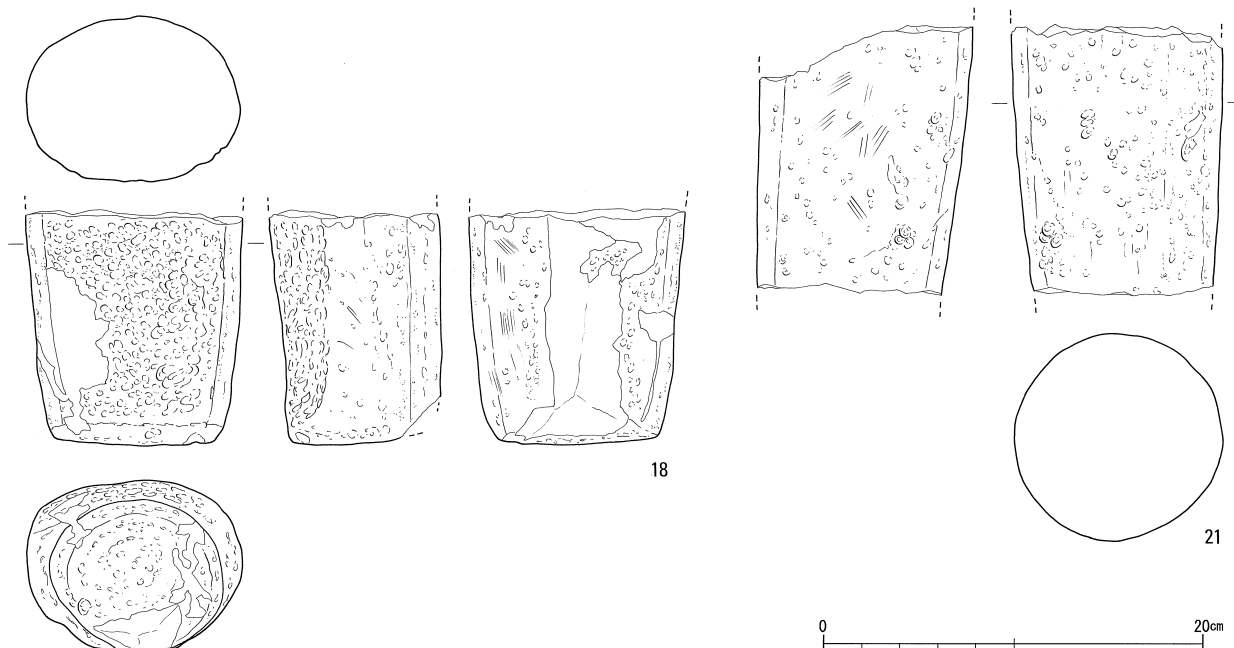
第3図 三重県下の大型石棒集成1 (2は文献1による。3は文献2、4～7は文献3、8は文献4をもとに作成。1：4)



第4図 三重県下の大型石棒集成2 (9～12は文献5、13は文献6、17は文献9、20は文献11による。19は文献10をもとに作成。1：4)



第5図 三重県下の大型石棒集成3 (1:4)



第6図 三重県下の大型石棒集成4 (1:4)

4 三重県内出土の大型石棒 (第1表・第3～6図)

今回、集成の対象にした大型石棒は頭部ないし胴部幅が10cm以上のものを基本とし、それに準ずる8cm以上のものも含めた。その結果、管見にふれたものは第1表の18遺跡23例(挿図にはこのうち、16遺跡21例を集録)を数える。ただし、県内には遺跡台帳に、単に「石棒出土」と記載されているだけで、今となつては行方不明のもの、大型の部類に相当するが、胴部の短い破片ゆえに見過ごされたり、製作途上の未製品と推定されるもの、「神宝」とされてなかなか、実見できないものなどが少なからず認められ、今回の集成ですべてを網羅し得た訳ではない。次に、大型石棒の出土状況・所属時期・形態的特徴・石材などについて、気の付いた点を簡潔に記しておきたい。

まず、出土状況について、発掘調査によるものは4遺跡(川向・天白・贅・清水北)の7例を数えるが、報告書に拠る限り、特に遺構との関連で取り上げるような事例は見当たらない。これら以外は開墾・耕作中の出土例(六反・城山・マイラ・佐八藤波遺跡など)とか、砂利採取工事中の出土例(西与次右エ門・道山)など不時発見によるものであるが、立地面では櫛田川流域のソウダ遺跡の2例などは、宮川流域の里遺跡と同様、いずれも被熱の痕跡を残さず、完形品ないしはそれに近い状態で、大きな河川に臨む段丘縁辺で出土している点が注意を惹く。いわば、豊饒を祈るための聖なるモニュメントとして位置づけられていたものと考えられる。

所属時期については大差地山?例が出土土器の傾向から中期中葉と推定されているが、これについては出土地が不確定であり、疑問が残る。⁽³⁾従って、今のところ県内最古の例として確実なのは川向遺跡の中期末葉であろう。あと時期が確定しているものでは天白遺跡など後期中・後葉の例が若干見受けられる。他に注目されるのは、道山例で、県内唯一の両頭石棒があげられる。⁽⁴⁾相伴遺物が不明なので確実な時期は分からないものの、南方の台地上には晩期・五貫森式期の土器棺が出土した西野遺跡が近い位置にあり、両者の関連性が想定される。⁽⁵⁾

形態的特徴では頭部不明のものを除くと、明確な無頭は見られず、大・小の頭部をもつ前述の両頭が1例(道山)あるほかは、単頭が圧倒的に多い。このうち城山例は鏝付で、原形は頭部両側に日の字の字画を楕円形にしたような浮き彫りを施している。このような頭部の作出から一見、御物石器に似ているが、そうではないようで、北陸・飛騨方面などのいわゆる鏝をもつ大型石棒の彫刻とも異なる、他に類例を見ないものである。マイラ例は頭・胴部

の側面数ヶ所に明瞭な小穴が観察され、何らかの石棒儀礼に伴って意図的に凹みを加えたものと推測される。類似の小穴は贅例の胴部にもあり、これらとは別に、ソウダ例の太く短い方は頭部平坦面の中央を窪ませている。

頭部の形状には細かく見れば、バリエーションが認められるが、概ね、笠状およびそれに近いものとやや丸みを帯びたものがあり、いずれにも1ないし2段以上の別がある。

また、折損・破砕例には表面が変色したり、剥落・亀裂が生じたりして、被熱の痕跡を残すものが数例（城山・清水北・天白の3例など）散見されることも見逃せない。

石材は大別すると、2つに分けられる。1つは伊勢湾西岸域では産出しない、凝灰岩系石材の搬入品であり、もう1つは、宮川流域など外帯の片岩系石材や内帯側の北勢では、員弁川支流青川源流部産出のハイアロクラスタイトなどの在地で調達可能なものに分かれる。後者には砂岩も含まれる。前者については、小型品とは異なって大型石棒ならではの特徴と言えるのではなかろうか。

以上、県内出土大型石棒の概略をみてきた。次は中・小型品の集成に向けて努力をしていきたい。

本稿を草するにあたり、岡田登・岡田雅幸・北川和美・北川ゆき・楠純子・小玉道明・斉藤理・酒井巳紀子・崎川由美子・田村陽一・中森巖・中森慰・南平秀生・野呂幸治・民上宗夫・山本達也各氏のお世話になりました。記して感謝を致します。

【註】

- (1) 長田友也 2006「三重県伊勢地域における縄文時代晩期の石棒類製作」『縄文時代』第17号 縄文時代研究会 では宮川流域における緑泥石片岩を素材とした、主に小型の石棒類製作に言及している。筆者は佐八藤波遺跡に加え、森添・池ノ谷遺跡も、特に晩期・突帯文期における同石材専用の石棒類製作遺跡と考えている。本遺跡の状況は今のところ、所属時期は不明であるが、大型石棒にも製作遺跡の可能性があることを示唆している。
- (2) 大下明 1995「近畿地方の石棒」『飛騨みやがわシンポジウム 石棒の謎をさぐる資料集』岐阜県宮川村教育委員会
- (3) 参考文献11の本文にも出土地の記載がないため気がかりになり、磯部郷土資料館・崎川由美子氏のご好意で実見をしたが、他の遺物にはよく見られる鈴木氏自身の出土地の注記は認められなかった。確かに同館所蔵の鈴木敏雄氏収集資料は柳谷を含む大差地山遺跡出土遺物がメインであるが、志摩各地や県下各地のものも含まれている。皇學館大學史料編纂所編 1991『鈴木敏雄氏遺稿・旧蔵史料目録』の整理番号3755には大差地山遺跡採集の石棒の写真があり、念のため、岡田登氏のご好意で実見をさせていただいたが、残念ながら、別物（これには鈴木氏自身の注記あり）であった。磯部郷土資料館所蔵の石棒には表面に黄褐色土の付着が認められる。この点は消極的ながら大差地山出土遺物に共通するが、それを決め手にはできず、現時点としては慎重に扱っておくべきであろう。
- (4) 鈴鹿市考古博物館・岡田雅幸氏のご好意により実見し、第1表の法量についてのデータも提供をしていただいた。
- (5) 葛山拓也 2003『西野遺跡・西野古墳群』四日市市遺跡調査会

【引用・参考文献（第1表の文献番号に同じ）】

- 1 春日井恒ほか 1993 『川向遺跡発掘調査報告』北勢町教育委員会
- 2 鈴木敏雄 1937 『三重県員弁郡阿下喜町考古誌考』（ガリ版刷）
- 3 鈴木敏雄 1945 『三重県員弁郡治田村考古誌考』（ガリ版刷）
- 4 江上辰男「山郷村大字麻生田に於ける遺跡及び遺物」『猪名部（総集編）』第2号 員弁高校郷土研究部
- 5 大下明 1995 「石製品」『天白遺跡』三重県埋蔵文化財センター
- 6 皇學館大学考古学研究会編 1987 『明和町の遺跡』
- 7 奥義次 1992 「原始」『多気町史 通史』多気町
- 8 奥義次 2001 「勢和村の考古遺跡」『勢和村史 資料編2』勢和村
- 9 奥義次 1987 「原始社会」『大宮町史 歴史編』大宮町
- 10 松本茂一ほか 1987 『鳥羽 贅遺跡 第2次発掘調査報告』鳥羽市教育委員会
- 11 大下明ほか 1992 「磯部町立郷土資料館所蔵資料の調査」『紀伊半島の文化史的研究—考古学編—』清文堂出版
- 12 穂積裕昌・田村陽一 1994 「上野市清水北遺跡出土の縄文土器」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター